

「男、突っ走る！」

第7回

第一稿

作・壽倉 雅

登場人物

五十川	鬼頭	宮田	志田	濱口	木内
孝之	美彩	春奈	悠喜	寧々	雅也
(16)	(16)	(16)	(16)	(16)	(16)
中央高校 1年6組 生徒	中央高校 1年6組 生徒	中央高校 1年5組 生徒	中央高校 1年2組 生徒	中央高校 1年2組 生徒	中央高校 1年2組 生徒

雅也、孝之、美彩、春奈が検定勉強を  
している——美彩、手を止めて背中を  
伸ばすと、

美彩「もうダメ。今日は、これまでにしよう」

春奈「早くない？ それ言うの」

美彩「何だか疲れちゃった」

孝之「もう音を上げるんですか。早すぎます  
よ」

美彩「良いの、私がもうやらないって決めた  
らやらないの」

雅也「確かに根詰めるのは良くないかもね。  
無理に勉強したって頭に入るわけないんだ  
もの、たまには休むことだって」

美彩「さすがパンテーン、理解してるじゃん」  
雅也「それにしても、中間試験が終わったと  
思ったらもう少しで二学期の期末試験。そ  
れが終わったら、もう十二月に入っちゃう  
んだもんね。一年早いわ」

春奈「こんなに追われてるものが多いと、一

年があつという間に終わるんだろうね。高校の三年間なんてあつという間に終わっちゃうんじゃないかな。中学の時の三年間と感覚が違うもん」

孝之「それぐらい、人間として成長したんですよ。時の流れが速く感じるということは、人生経験を積んできた証拠ですよ」

雅也「ちよつと何言ってるか分からない」

孝之「いやいや木内君、何をおっしゃいますか」

雅也「まあ確かに、中学一年生なんてまだ小学生から上がってすぐだから、まだ子どもっぽさが残ってるかもしれない。けど、中学三年から高校一年って考えたら、多少は大人になってるかもしれないよね」

美彩「それは言えてるかも」

雅也「最近一ヶ月の感覚が早く感じるもん。そろそろ世の中はクリスマスムードなんだろうね」

孝之「皆さんは、クリスマスのご予定は？」

雅也「俺は家族と過ごす。といっても、年末年始は広島で過ごすの」

孝之「広島？」

雅也「うん。父さんの実家が広島にあってね。それで、年末年始は親戚集まることにしてるの」

孝之「車で行くの？」

雅也「新幹線。父さんが今、福岡に単身赴任中でしょ。だから父さんは福岡から車で広島に行つて、俺たちは新幹線で広島駅に行く。そこで合流するつて流れ。クリスマス

スは、家で普通に母さんと弟と楽しむよ」

孝之「（美彩と春奈に）お二人は？」

美彩「私はどうしようかなあ。バイト入れようかな」

雅也「あれ、美彩バイトしてたっけ？」

美彩「ちゃんと届けは出したよ」

雅也「よく受理されたね」

美彩「私もよくわかんないんだけどね」

春奈「私は彼氏とデートします」

雅也「もしかして、四組の子？」

春奈「パンテーンに紹介したっけ？」

雅也「たまに一緒に見かけるから。あの、身

長が大きい子でしょ？」

春奈「そう」

雅也「五十川君はどうなの？ 彼女と過ごす

の？」

孝之「いませんよ、彼女なんて」

雅也「へえ、意外。俺、てっきり五十川君に

はそういう人いると思ってた」

孝之「残念ながらいらないですね、これが」

雅也「じゃあ俺と一緒に、家族と過ごすわけ

だ」

孝之「そういうことですね。逆に、木内君も

いないのは意外だった」

雅也「俺はね、見事にそういうのとは無縁の

生活送ってるから。入学してすぐに、クラ

スの自己紹介カードに、『彼女募集中で

す！』って書いたけどさ、そんなの見て彼

女になりたいなんて言う女子がいるわけな

いでしょ。だから、あれは半分ギャグのつもりで書いたの」

春奈「半分ギャグってことは、もう半分は本気だったってこと？」

雅也「来たら良いかなっていうレベルよ。本気で彼女欲しかったら、そんなのに書くよりももっといろんな手段があると思うし。まあ、その手段が分からないまま今に至ってるんだけど」

春奈「大丈夫だって。パンティンなら、すぐにできるって」

雅也「けど、どこに出会いの場があるって言うのさ。うちのクラスは、女子が六人しかいないし、別に恋愛対象として見てる子もいないしね。他のクラスだって、知り合うきっかけないんだもの」

春奈「何も学校内で見つけなくても良いじゃない」

雅也「じゃあお聞きしますけど、学校外でどうやって出会いを見つけるって良いんです

か？ 教えてください」

春奈「そりゃバイトだったり習い事だったり、  
学校外で人とふれあう場に行くことだよ」

雅也「なるほどねえ……でも春奈だって、相  
手学校の同級生じゃないのよ」

春奈「まあ、それはそうなんだけどね……学  
校のほうが見つけやすいと言えれば見つけや  
すいから」

孝之「クラスが違う人とどうやって仲良くな  
れるんです？」

雅也「うん、俺もそれ気になる」

春奈「友達からの紹介とか、グループで一緒  
に動いてそこから仲良くなるの。そうすれ  
ば休みの日にみんなで遊んだりして、そこ  
から仲良くなることができるでしょ」

思わず顔を見合わす雅也と孝之。

雅也「春奈。天才だわ。恋愛マスターとは、  
まさに春奈みたいな人のことを言うんだよ。  
何かこう、すごーく、ピンク色の後光が差  
してる気がするよ」



春奈「言い過ぎだって」

美彩「でも春奈の言うことを実践したら、意外と縁はあるかもしれないよね」

孝之「（雅也に）その点については、どうお考えですか？」

雅也「確かに出会いがあれば良いなって思ってたけど、勉強やら部活やらいろいろやってたら、なかなか彼女との時間なんて作れないような気がしてきたわ」

春奈「え？」

雅也「逆にみんな起用だなって思うもん。特に春奈なんてさ、進学クラスだから模試だってあるでしょ。勉強のレベルだって、うちのクラスより全然違うだろうし。だから勉強も部活もやって、プライベートも充実させてる人見るとうらやましいって思うもん」

美彩「パンテーンは誰目線なの」

雅也「でも、純粹にすごいと思わない？ 勉強だって部活だって、まあまあな時間取ら

れるんだよ。それで恋人との時間まで作らなきゃいけない。どういうスケジュール調整したら、そんな時間作れるのかなって思う」

美彩「そりや何とでもなるでしょ。家にいる時間とか、家族との時間を削ったりさ」

雅也「道草せずにまっすぐ家に帰ってる俺のリズムがそもそも違うのかな？」

美彩「その生活リズムを壊したくないって言うんだったら、恋愛は無理だろうね。多分パンテーンは家族思いだから、絶対恋人より家族との時間を選ぶでしょ」

雅也「そりやもちろん。まあ、クリスマスを家族以外の人と過ごしたことがないから、そう思うだけなのかもしれないけどね」

美彩「本当に、無縁な生活送ってきたんだね」  
雅也「だからそうやって言ってるじゃない。

恋愛とは無縁の生活を送ってきて今に至ってるんだから」

美彩「なるほどねえ」

雅也「入学当初は、彼女ができれば良いかな  
って思ってたけど、いざ学校生活に慣れ始  
めると、なかなかそんな余裕もなくて。多  
分、今彼女ができたとしても、一ヶ月もた  
ない自信があるもん」

孝之「そんなものに自信もたないだよ」

雅也「けど本当にそう思うんだもん。だから  
どう頑張っても、今の俺には彼女はできな  
いかな。というか、彼女はいらないかもし  
れない」

春奈「まあ、そういう考えも一つかもしれな  
いよね。別に彼女がいなくても、学校生活  
は充実して楽しめるだろうし」

雅也「そう。好きな人を作って楽しみたい人  
がいれば、その人の好きなようにすれば良  
いんだよ。外野がとやかく言うことじゃな  
いの」

孝之「考えさせられるねえ」

雅也「あれ、何でこんな話になっちゃったん  
だっけ？」

春奈「クリスマスをどう過ごすかって話で、  
いつの間にかこんな壮大な話になってた」

雅也「そうだそうだ」

と、笑い合う一同——ノック音がして、  
悠喜と寧々が入ってくる。

寧々「ここにいたんだ」

雅也「あれ、どうしたの？」

悠喜「明の英語の追試」

雅也「ああ、小テストの」

寧々「土曜日だっていうのに、みんな追試受  
けに来てたよ。職員室前の廊下、行列でき  
てたもん」

春奈「苦戦してるんだ、二組も佐藤先生の小  
テスト」

寧々「春奈たちもあるでしょ。小テスト」

春奈「あるよ。私も昨日、並んだもの」

悠喜「木内は終わったのか？」

雅也「今日、午前から部活あるの分かったた  
から、昨日のうちに終わらしたの」

寧々「部活で来てたんだ。駐輪場に、木内の

自転車があったから、追試受けに来てるのかと思ってたんだけど、いないんだもん。それで、今日コンピュータ部が部活やってるって聞いたから、顔出そうと思って」

雅也「そりゃ、悪かったね」

悠喜「だって追試受けてすぐ帰るのもの。こっちだって、片道三十分近くかけて自転車こいで通ってるんだから。先生らは良いよ、車だから」

雅也「それに、佐藤先生地元の人だから、車で十分もあれば着いちやう距離だからね」

悠喜「そうなの？」

雅也「うん。佐藤先生の奥さん、俺の中学校の時の家庭科の先生って言ったでしょ。前に年賀状書くために住所教えてもらってからさ、大体の場所分かるんだよね」

悠喜「早く車持ちたいな」

雅也「あと二年の辛抱だよ」

孝之「せっかく来たんだから、検定の勉強でもしてく？」

雅也「ああ、それ良いかもね。俺たち、今度二級の試験受けるんだよ。志田と濱口は受けるんだっけ？」

寧々「私は受ける予定」

悠喜「俺はやめとくわ」

雅也「どうして？ 三級受かったじゃん」

春奈「え、志田が三級受かったの？」

悠喜「どういう意味だよ」

春奈「だって、検定受けるようなイメージないから」

美彩「確かに。中学校の時から、そんなイメージ全くない」

悠喜「クラスで受ける流れになったから、仕方なくだよ。二級になったら、難易度あがるだろ。受けるだけ無駄な気がしてさ」

寧々「でも、就職する時にある程度検定合格してたら有利かもしれないよね」

雅也「そう」

寧々「木内もそのつもりで受けるんでしょ？」

雅也「まあね。将来事務系に行くこと考えた

ら、やっぱり最低限の検定は受験して合格  
しておこうと思って」

悠喜「事務系目指してるんだっけ？」

雅也「うん。パソコン使えるからさ、書類作  
ったり、細かい事務作業したり……体動か  
す現場仕事より、俺にはそっちのほうが合  
ってる気がしてさ」

悠喜「確かに、お前なら似合いそうだわ」

雅也「志田はこれからどうするの？」

悠喜「どうしようかな。楽器は趣味だから、  
まずそっち系はないだろうし、適当に学校  
にきた求人から探そうかな」

雅也「生活費稼ぐためだったら、学校の求人  
から探すのも良いんだろうね」

悠喜「木内みたいにこういう仕事をしたいつ  
ていう目標も特にないからな」

雅也「そっか」

寧々「私も、製造業だったら何でも良いかな」  
春奈「就職組はそういう感覚なんだ。私たち  
は、とにかく模試でレベルを見て、行けそ

うな大学決めたり、学びたいことが学べる  
大学のレベルを目指して勉強するしかない  
からね」

寧々「進路は決まってるの？」

春奈「私は歯科衛生士」

美彩「私は看護師。市民病院の系列の看護学  
校目指してるの」

悠喜「すごい世界だよね。同級生なのに、ク  
ラスが違うだけで、こんなにも変わっちゃ  
うものなんだね」

孝之「元々五組と六組にいる段階で、進学す  
ること前提ですから」

寧々「そっか」

悠喜「五十川は、何目指すんだ？」

孝之「目指すというか、経営を学びたいなっ  
て思ってる」

雅也「経営って、社長にでもなるの？」

孝之「いずれはね。車が好きだから、社長の  
運転手になって、そこから階段を登ってい  
けたらなって」



雅也「めっちゃめっちゃ具体的じゃないの」

孝之「好きなことを仕事にしたいなっていう面では、木内君と同じですよ」

雅也「まあ俺も、好きな分野というか、自分にはこれが合ってるって思うから事務系目指してるけどね。ただ、高卒で事務の求人があるのかな？ 事務ってもしかしたら、専門学校とか大学で、それこそ五十川君みたいに経営とか経済の勉強もしないと採用してもらえないのかな」

孝之「そんなことないと思いますよ」

雅也「まあ、今こんな話してもしようがないか。求人票次第だろうし、高校の間にちゃんと資格取れば、それが有利になることもあるかもしれないもんね。検定勉強頑張ろう」

悠喜「そういえば、きのじゅんが来年度からクラス変えるって言ってたぞ」

雅也「え、きのじゅんが？」

悠喜「検定に落ちたこと引きずってるんじゃないや」

ないかな」

雅也「まあ、パソコンがただ好きなのと、検  
定勉強して資格取るとは訳が違うからね。  
けど、きのじゅんがクラス変えるなんて話、  
一体どこから聞いたの？」

悠喜「ブログだよ」

雅也「ブログ？」

悠喜「あいつのブログ見てたら、そんなよう  
なことが書いてあったから」

雅也「そっか……」

悠喜「木内も日記みたいな感じでブログ書い  
てたじゃないか。確か、きのじゅんとお互  
いにフォローしてるから、あいつのブログ  
はもうチェックしてると思ってた」

雅也「検定勉強のことでいっぱい、最近ブ  
ログ更新してなかったから、全然きのじゅ  
んのブログもチェックしてなかったんだよ」

孝之、パソコンの画面を見る。

孝之「あ、ほんとだ。きのじゅん、そうやっ  
てブログに書いてある」

雅也「……」

悠喜「おっちゃんとは相変わらず、自分のブログで競艇の予想について書いてたよ」

雅也「本当に、かどけんはぶれないね。しかも二人とも、謹慎中だって言うのに。そろそろ一ヶ月経つけど、二人ともどうなんだろうね。もう復帰しても良い頃かな？」

悠喜「さあ、どうだろうな。謹慎課題がどれぐらい終わってるかだけだ」

雅也「確か、前に光永君が謹慎になったときは二ヶ月ぐらいかかってたよね」

悠喜「あれは、光永が何もやらなかったからだよ。多分真面目に謹慎課題を進めてたら、一ヶ月ぐらいで戻れるような話は聞いたぞ」

雅也「そういう情報は詳しいんだな」

悠喜「おい」

寧々「(孝之たちに)普段のクラスでも、木内と志田とかどけんときのじゅんは一緒にいることが多いの。けど、その二人が謹慎でないから寂しいみたいだよ」

悠喜「当たり前前だろ。おっちゃんは、俺たちのグループの中心メンバーなんだから。軸がいないと、まとまらないんだよ」

寧々「何言ってるの。確かに中心かもしれないけど、自分勝手なメンバーたちを縁の下  
の力持ちで支えているのは木内なんだからね」

雅也「よく分かってんじゃん」

寧々「毎日見てるからね、あんたたちのことは」

孝之「やっぱり木内君はそういう立ち位置なんだ」

雅也「結構大変なんだよ、かどけんとか志田を誘導させるの」

悠喜「誘導って、俺はマシだろ」

雅也「どっかの誰かみたいに、競艇新聞と煙草を鞆に入れて学校に持ってきてることを考えたら、そうかもしれないけどね。でも、たまに先生に不愛想な態度したり、頭髪検査でちよつと反抗するような目つきしたり、先生と志田が一緒にいるところを見るだけ」

で、こっちがヒヤヒヤするんだから」

美彩「志田が先生に反抗的になってたのは、  
今に始まったことじゃないよ」

春奈「当時はそれが志田にとっての当たり前  
だったし、パンテーンみたいに中間に入っ  
て志田にブレーキをかけてくれるような人  
はいなかったから」

雅也「志田の態度は、中学から変わってなか  
ったんだ」

悠喜「俺、教師嫌いだもん」

雅也「今更開き直らないの」

春奈「でも、二組にはパンテーンがいるんだ  
もの安心でしょ」

悠喜「学級代表代理を任せられるぐらいだか  
らな」

雅也「あんな思いは二度とごめんだわ」

悠喜「二年になったら、木内が学級代表にな  
れば良いのに」

雅也「良いよ。俺は先頭に立つより、後ろか  
ら支えるほうが向いてるんだから」

孝之「いや、意外と木内君先頭も行けると思  
いますよ」

雅也「五十川君までそんなこと言って……も  
うやめよう、この話は。みんなで自販機行  
こう」

悠喜「俺たちは、そのまま帰る」

寧々「うん」

雅也「ありがとね、わざわざ顔出してくれて」

孝之「何飲もうかな」

寧々「私、炭酸かな」

と、出ていく一同――机の上に置いて

ある雅也の携帯に着信がかかってくる。

賢汰からである。

つづく